

自然とオリンピック

上 田 福 雄



定年すぎという生活環境がそうさせるのか、近頃とみに自然というものの考え方の関心が深まり、ものあわれを感じるようになってきた。もともと素朴なもの、自然の風情が好きで、心ひかれるものがあつたが、最近はずます、一木一草、虫けらはてにまで、その想いが強くなってきたようだ。

去年の夏、わが家の庭に一匹の蛇が住みついて家族の者を驚かせたことがあつた。一メートルあまりの青大将で、むし暑い日の午後はかならずといってよいほど、庭先のペランダの蔭で昼寝をしていた。かみさんや近所の奥さん達が騒ぎたてて、保健所へ電話して蛇退治をせよなどといっていたが、私は危害もなにも加えない蛇だから、寝たければ寝かせておきなさい、蛇にも、ともに住む権利はあるし、あるいは私たちより先にこの地主であるかもしれないから、といってとりあわなかつた。

やがて涼しい風が吹いて秋口になると、いつの間にかその姿を見せなくなつてしまつた。そろそろ冬眠の仕度にかかつたのだらう。藪原の中のが家にとつては、蛇もまた自然の風情のひとつである。

そんなわけで、わが家の周辺は灌木とササ藪にかこまれた丘の傾斜地で、春は路の臺からはじまつて、スミレ、タンポポはいうにおよばず、エゾエンゴサクや二輪草があたり一面に咲き乱れ、山ウドやワラビも摘める、楽しい環境である。藪ウグイスが稚拙な歌をうたえば、郭公はそれにこたえて伴奏をする。思わず、札幌市民ということを忘れさせてくれるようなのどけさである。しかし、近くオリンピックにそなえての道路工事がはじまるというから、この、のどけさもあといくばくもないだらう。まことに残念なことである。

地域の開発とか、近代化とか、あるいはオリンピックだとか、それらの美名のもと

に、だんだん自然が破壊され、失われていくということは、どうしても我慢がならないし、口惜しいことである。

デパートの壁面にかざられた「オリンピックまであと〇〇〇日」という電飾をみると、わずか数日のオリンピックというお祭り騒ぎのために、幾百年、幾千年もの歳月を経てきた自然の美しさがそこなわれ、罪もない樹林がなぎ倒されてゆくのかと思うと、無性に腹がたつてくる。オリンピック道路のために札幌神社の立木が七百本も伐られたとか、支笏湖のオコタンベと恵庭岳の原始林に自動車道路をつけるとか、そういうニュースはますますこの老人の血圧をあげて、いらだたせる。

なぜそうまでして、オリンピックを招致しなければならぬのだろうか。自然の環境の中であるがままの姿でオリンピックはできないものだろうか。参加することに意義があるオリンピックなら、施設などは問題外のはずである。大切な多額の税金をつかって、わざわざ自然を破壊するにはおよばないだろう。

当事者達は、オリンピックがすんだら復元するからいいだろう、という。しかし人工物は復元できても、自然は復元できるものではない。何千年も経てきた自然林が、人工でできるかどうか。

三角山が今春から緑の復元をするという。あれもいままでさんさんカッチャかれたり、ヒッカカレたりして丸坊主になっていたが、当局は知らん顔。たまたま天皇陛下が来道されて「あの山はどうしたのか——」と質問になったので、知事と市長があわてて折半で山を買収して、緑の復元ということになったとか。復元しないよりも、むしろ、しかしこれからいくら土を選び、木を植えても、緑色にはなるが、昔の三角山にはならないだろうと思う。それはあくまで人工の三角山であって、幾百年も自然にあった三角山ではないのである。

大通公園にしても、花壇があつて並木があつてとてもきれいだ。が、それはあくまでも人工の美であつて、素朴な自然の美しさというものはさらさらない。良い例が、北大植物園とくらべてみれば、その美しさのちがいがはつきりすると思う。

とにかく私は産業主義の犠牲になって、自然が失われていくことに大きな反駁を感じる。これは私の臍まがりの年のせいでもないだろう。健全な人間生活にとつて、自然は、欠くべからざる要素であると思うからだ。